

## 癌の研究で「幻のノーベル賞」！

今年、本庶佑さんがノーベル賞を受賞しました。日本人で26人目。しかし、日本人最初の湯川博士の受賞より23年も前にノーベル賞の最終候補に残っていた日本人がいたことをご存知でしょうか。山際勝三郎博士です。博士は東大病院で3千もの遺体を解剖して胃癌が多いことに気づき、胃癌は胃潰瘍ができた所を暴飲暴食が刺激することによってできると考えました。そして、何かの刺激で癌ができることを実証したいと、癌を作る実験を始めました。まず、ネズミの耳に毎日針で刺激を与え続けました。しかし結果が出ません。そんなとき、畜産学を研究している市川厚一という大学院生がやってきました。山際博士は、市川さんを助手にし、兎の耳にコールタールを塗ることを命じました。イギリスの煙突掃除夫がよく皮膚癌になるケースに注目、コールタールの刺激が癌の原因ではないかと考えたのです。コールタールを塗って、乾いたらはがしてまた塗るという作業の繰り返

しです。梅雨の湿気や夏の暑さで多くの兎は弱っていきます。畜産学者でもある市川さんは懸命に兎の世話をし、風呂にも行かずひげはぼうぼう、顔はタールで腫れ上がり、助手仲間から「蝦夷熊」と呼ばれるほどでした。しかし結果は出ません。でも、「他の人は途中で諦めてしまうから結果が出ないのだ。」と、同じ作業を3年続けました。すると、ついに兎の耳に癌ができたのです。世界最初の人工癌。画期的な成果で、ノーベル賞の候補にあがりました。しかし、癌を発生させたという学者が他にもいて、受賞はその人に決まりました。だが後にその学者の方法では癌ができないことがわかり、40年後の世界癌学会で、その時のノーベル賞は山際博士に与えるべきであったと報告されました。そして今、世界中で使われている癌医療の英字教科書の巻頭には山際博士が登場しています。

山際博士は、「途中で諦めないで継続することが重要」と言い続けました。この言葉、子どもたちにも伝えたいですね。(井上剛)

